



Title	インドネシア語に見られるアラビア語格母音の名残
Author(s)	森村, 蕃
Citation	大阪外国語大学学報. 1981, 52, p. 95-104
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80834
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

インドネシア語に見られる アラビア語格母音の名残

森 村 蕃

Case Ending Bahasa Arab yang tersirat dalam Perkataan Indonesia

Shigeru Morimura

Classical Arabic mengenal case ending, yaitu /u/, /a/, dan /i/. Menurut hemat saya, di antara perkataan Indonesia yang asalnya dari bahasa Arab ada yang di dalamnya tersirat case ending tersebut. Alasannya adalah sebagai berikut.

- 1 . Perkataan itu, kalau dieja dengan huruf Jawi, sama dengan asalnya yang ada dalam Classical Arabic.
- 2 . Perkataan itu artinya sama dengan asalnya yang ada dalam Classical Arabic.
- 3 . Pada perkataan itu tampak jelas ciri khas bunyi asalnya dalam Classical Arabic yang diadakan pada waktu diucapkan.

Dialek bahasa Arab kiranya tidak mengenal case ending tersebut. Kalau demikian, maka boleh dikatakan, bahwa perkataan Indonesia yang di dalamnya tersirat case ending tersebut berasal dari Classical Arabic, bukan dari dialek bahasa Arab.

は じ め に

インドネシア語には非常に多くのアラビア語起源の言葉が見られる。書き言葉からのものもあれば、話し言葉からのものもあろう。インドネシア語に見られるこのアラビア語起源の言葉の中には、古典アラビア語（正則アラビア語）の格母音（Case Ending）の名残がとどめられているものがあるように思う。一般に外国の言葉を取り入れる場合、当然、自国語のスブストラム（Substratum）が作用するが、本稿で扱うアラビア語起源の言葉に古典アラビア語の格母音の名残がとどめられていると考える理由は、ジャウィ文字（アラビア文字）によるそれらの言葉の表記が、またそれらの言葉の意味が古典アラビア語のものと一致するのみならず、もともと古典アラビア語が発音される際の音形の特徴がそれらの言葉にあまりにも明瞭に表れているからであ

る。

本稿の目的は、インドネシア語に見られるアラビア語起源の言葉の中に古典アラビア語の格母音の名残が如何にとどめられているか例証することにある。

I

アラビア語は古典アラビア語（正則アラビア語）と口語のアラビア語方言とに分けられるが、古典アラビア語には格を表す格母音（Case Ending）として/u/,/a/,/i/がある。/u/は主格、/a/は対格、/i/は属格を表す。格母音はアラビア文字では表記されない。

كتاب	kitābun	＜ある一冊の本は＞	主格
كتابا	kitāban	＜ある一冊の本を＞	対格
كتاب	kitābin	＜ある一冊の本の＞	属格
الكتاب	alkitābu	＜その本は＞	主格
الكتاب	alkitāba	＜その本を＞	対格
الكتاب	alkitābi	＜その本の＞	属格

また、格変化において対格と属格が同じ格母音/a/をとるものがある。

مدارس	madārisu	＜いくつかの学校は＞	主格
مدارس	madārisa	＜いくつかの学校を＞	対格
مدارس	madārisa	＜いくつかの学校の＞	属格

但し、この対格と属格が同じ格変化をするものは、定冠詞とか人称代名詞の接尾辞とかがついたときや、あとに属格の名詞がきたときは、別々の格変化をし、対格母音は/a/、属格母音は/i/である。

المدارس	almadārisu	＜それらの学校は＞	主格
المدارس	almadārisa	＜それらの学校を＞	対格
المدارس	almadārisi	＜それらの学校の＞	属格

さて、インドネシア語においてアラビア語起源の言葉の中には上述の格を表す格母音（Case Ending）の名残が見られるのである。格母音の名残がとどめられていると考える理由は、ジャウィ文字（アラビア文字）によるそれらの言葉の表記が、またそれらの言葉の意味が古典アラビア語のものと一致するのみならず、もともと古典アラビア語が実際、発音される際の音形の特徴がそれらの言葉に極めて明瞭に表れているからである。主格母音/u/は/u/の音で、対格母音/a/は/a/の音で、属格母音/i/は/i/の音でその名残がとどめられている。それらの言葉のジャウィ文字による表記では、古典アラビア語のものの字体がそのまま用いられるために、格母音の名残

はジャウィ文字の上では表れてこない。しかし、ローマ字による表記では、格母音の名残は文字の上に表れてくる。即ち、/u/の音は u、/a/の音は a、/i/の音は i で表れる。

まず、古典アラビア語の文章起源の言葉における格母音の名残の例を見よう。

(a) wallahualam /wallahualam/ <そして神は最もよく知り給う。>

wallahu /wallahu/ の最後の /u/ の音が主格母音 /u/ の名残である。wallahualam は次の古典アラビア語に起源をたどることができる。

والله اعلم wallāhu 'a'lamu <そして神は最もよく知り給う。>

wa <そして>は接続詞であり、الله allāhu <神は>は主格で主語の働きをしている。اعلم 'a'lamu は عالم 'ālim <知っている>の比較級、最上級の形である。الله allāh <神>はもともと الإله 'ilāh <神>の前に定冠詞の al がついて出来あがった語である。従って、この allāh という語のはじめのハムザ (Hamza) はハムザトゥル・ワスル (Hamzatulwaṣl) といわれ、allāh の前に語がきた場合、これらが続けて発音される際、このハムザは発音が省略される。またこのとき、ハムザの次の母音 /a/ も同時に発音が省略される。つまり、allāh の前に語がきた場合、これらが続けて発音される際、allāh のはじめのハムザと母音 /a/ は発音が省略される。いま allāh という語の前に wa <そして>という語があるから、これらが続けて発音されると、wa の /a/ の音は allāh の /l/ の音に続けられる。wallāhu の最後の u の音は、主格を表す主格母音 /u/ の発音であり、その名残がインドネシア語の中にとどめられている。

尚、wallahualam のあとに bissawab がついた言葉、即ち wallahualam bissawab /wallahualam bissawab/ <そして神は真実を最もよく知り給う>という言葉がインドネシア語にある。これは次の古典アラビア語に起源をたどることができる。

والله اعلم بالصواب wallāhu 'a'lamu biṣṣawābi <そして神は真実を最もよく知り給う。>

biṣṣawābi <真実に関して>は、前置詞 ب bi と صواب ṣawāb <真実>に定冠詞の al がついた الصواب al-ṣawāb が続けて発音されたものである。al と ṣawāb が続けて発音されると、al の /l/ の音は ṣawāb の最初の音である /ṣ/ の音に同化される。つまり aṣṣawāb と発音される。古典アラビア語において、太陽文字 (Ḥurūf Shamsīya)、即ち Ta', Tha', Dāl, Dhāl, Rā', Zāy, Sīn, Shīn, Ṣād, Dād, Tā', Zā', Lām, Nūn の14文字のいずれかではじまる語に定冠詞の al がつくと、これらが続けて発音される際、al の /l/ の音は次にくる太陽文字の音に同化される。いま ṣawāb は Ṣād という太陽文字ではじまるので、前にある al と続けて発音されると、al の /l/ の音は Ṣād の音の /ṣ/ に同化されるのである。aṣṣawābi の i の音は属格母音 /i/ の発音である。前に前置詞 bi があるため、古典アラビア語において前置詞のあとの語は属格でなければならないからである。尚、定冠詞 al のはじめのハムザはハムザトゥル・ワスルであって、al は前にくる語と続けて発音されると、al のはじめのハムザと母音 /a/ は発音が省略される。いま al-ṣawāb の前に bi という語があるから、これらが続けて発音される際、al のはじめのハムザと母音 /a/ は発音が省略される。al-sawāb における al の /l/ の音は、ṣawāb の /ṣ/

の音に同化されるから、bi 以下の全体が続けて発音されると biṣṣawābi と発音される。古典アラビア語が実際発音される際の同化 (Assimilation) の音形の特徴が、いまインドネシア語 wallahualam bissawab における bissawab/bissawab/ に表れているのである。

(b) la ilaha illa'llah(u) /la ilaha illallah(u)/ <アラーの神以外に神は存在しない。>

ilaha /ilaha/ の最後の /a/ の音が対格母音 /a/ の名残である。また illa'llahu /illallahu/ の最後の /u/ の音は、主格母音 /u/ の名残である。

この la ilaha illa'llah(u) は次の古典アラビア語に起源をたどることができる。

لا اله الا الله la 'ilaha 'illallahu <アラーの神以外に神は存在しない。>

لا ila は名詞を打ち消す否定語であって、次にくる名詞 اله 'ilah <神>を打ち消している。la のあとには対格の名詞がくるのであり、従って 'ilaha の最後の a の音は対格母音 /a/ の発音である。その名残がインドネシア語にとどめられている。'illallahu は、<～を除いて>という意味の لا 'illā という語と الله allāh という語が続けて発音されたもので、<アラーの神を除いて>を意味する。前述の通り、allāh という語は前にくる語と続けて発音されると、allāh のはじめのハムザと母音 /a/ は発音が省略されるから、いま 'illā と allāh が続けて発音されると、'illā の /ā/ の音は allāh の /l/ の音に続けられる。'illallahu の最後の u の音は、主格である allāh の主格母音 /u/ の発音であり、その名残がインドネシア語にとどめられているのである。

(c) sallallahu alaihi wa salam /sallallahu alaihi wa salam/

<神よ、彼 (マホメット) に恵みを与え、救い給え。>

これは、マホメットの名のあとに使用される賛辞であって、略して s. a. w. と書かれる。sallallahu /sallallahu/ の最後の /u/ の音が、主格母音 /u/ の名残である。

この sallallahu alaihi wa salam は次の古典アラビア語に起源をたどることができる。

صلى الله عليه وسلم ṣallāllāhu 'alaihi wa sallama

<神よ、彼 (マホメット) に恵みを与え、救い給え。>

صلى ṣallā は動詞完了形で、主語が三人称・男性・単数のときの形である。あとに前置詞 على 'alā をとって صلى على ṣallā 'alā で<祝福を与える>という意味を表す。ṣallā と allāh が続けて発音されると、allāh のはじめのハムザと母音 /a/ は発音が省略されるので、ṣallā の /ā/ の音は allāh の /l/ の音に続けられる。ṣallā の主語は allāh であるから、ṣallāllāhu の u の音は主格である allāh の主格母音 /u/ の発音である。その名残がインドネシア語にとどめられているのである。علي 'alaihi <彼 (マホメット) に>は、前置詞 على 'alā に三人称・男性・単数の人称代名詞の接尾辞 ه hu がついた形である。'alā はアリフ・マクスーラ ('alif Maqṣūra) でおわるから、hu がつくると عليه 'alaihi となる。前述の通り、و wa <そして>は接続詞である。سلم sallama は動詞完了形で、主語が三人称・男性・単数のときの形であって、<救う>という意味を表し、その主語は前方にある الله allāh である。この文全体は祈願文であって、<神は、彼 (マホメット) に祝福を与えることを、また彼を救うことを祈る>という意味を表している。

次に、古典アラビア語の句起源の言葉における格母音の名残の例を見よう。

(a) lillahi /lillahi/ <神に対して>

/lillahi/ における最後の /i/ の音が属格母音 /i/ の名残である。

この lillahi は古典アラビア語の لِلّٰهِ lillāhi <神に対して>に起源をたどることができる。古典アラビア語の lillāhi は前置詞 لِ li <に対して>と الله allāh が続けて発音されたものである。古典アラビア語において前置詞のあとの名詞は属格でなければならないから、li と allāh が続けて発音されると lillahi となる。つまり lillahi の最後の i の音は属格母音 /i/ の発音であり、その名残がインドネシア語にとどめられているのである。

(b) billahi /billahi/ <神かけて、きっと>

/billahi/ の最後の /i/ の音が属格母音 /i/ の名残である。

この billahi は古典アラビア語の بِالله billāhi <神かけて、きっと>に起源をたどることができる。古典アラビア語の billāhi は前置詞 بِ bi <によって>と الله allāh が続けて発音されたものである。allāh は前置詞のあとにあって属格であるから、bi と allāh が続けて発音されると、billāhi となる。つまり billāhi の最後の i の音は属格母音 /i/ の発音であり、インドネシア語の中にその名残がとどめられているのである。

(c) wallahi /wallahi/ <神かけて>

/wallahi/ の最後の /i/ の音が属格母音 /i/ の名残である。

この wallahi は古典アラビア語の وَالله wallāhi <神かけて>に起源をたどることができる。古典アラビア語の wallāhi は وَ wa と الله allāh が続けて発音されたものである。wa は誓いにおいて使用される Particle、あるいは前置詞といわれ、この wa のあとにくる名詞は属格でなければならないから、wa と allāh が続けて発音されると、wallāhi となる。つまり wallāhi の最後の i の音は属格母音 /i/ の発音であり、その名残がインドネシア語にとどめられているのである。

(d) bismillah(i) /bismillah(i)/ <神に誓って>

/bismillah(i)/ における /bismi-/ の最後の /i/ の音が属格母音 /i/ の名残である。

この bismillah(i) は古典アラビア語の بِسْمِ الله bismillāhi <神に誓って>に起源をたどることができる。古典アラビア語の bismillāhi は前置詞 بِ bi <によって>と اسم ism <名前>と الله allāh が続けて発音されたものである。ism は前置詞 bi のあとにあるから属格であり、allāh も属格で前の ism を修飾する。ism のはじめの「ハムザトゥル・ワスル」とアリフ ('alif) が省かれ、bi と ism は bismi と発音される。allāh という語は、前にくる語と続けて発音されると、allāh のはじめのハムザと母音 /a/ は発音が省略されるから、いま ism と allāh が続けて発音されると、ism の属格母音 /i/ は allāh の /l/ の音に続けられる。従って、bi 以下の全体が続けて発音されると、bismillāhi となる。bismi- における最後の i の音は ism の属格母音 /i/ の発音であり、その名残がインドネシア語にとどめられているのである。尚、インドネシア語に

bismillah の最後に i がついた bismillahi も見られるが、その最後の /i/ の音はやはり属格母音 /i/ の名残である。即ち、allah の属格母音 /i/ の名残がインドネシア語にとどめられているのである。

このように、インドネシア語における古典アラビア語起源の言葉の中に古典アラビア語の主格、対格、属格を表す格母音の名残がとどめられている。

II

古典アラビア語における格を表す格母音の名残は、古典アラビア語の複合語起源の言葉の中にも見られる。

古典アラビア語の複合語起源の言葉の中にも格母音の名残がとどめられていると考えられる理由は、ジャウィ文字によるそれらの言葉の表記が、またそれらの言葉の意味が古典アラビア語のものと一致するのみならず、それらの言葉の音形にもともと古典アラビア語の複合語全体が実際、発音される際の音形の特徴が極めて明瞭に表れているからである。それら古典アラビア語複合語起源の言葉は、ローマ字による表記では、通常、ひと綴りで表記される。例えば ahlulbait /ahlulbait/ <家族の人々>は、ジャウィ文字による表記では古典アラビア語における字体がそのまま使用されるが、ローマ字による表記ではひと綴りで表記されるのである。ahlulbait は次の古典アラビア語の複合語に語源をたどることができる。

اهل البيت ahlulbaiti <家族の人々>

これは اهل ahl <メンバー；人々>と بيت bait <家>に定冠詞 ال al がついた البيت al-bait によって構成される複合語である。al-bait は属格で、前の ahl を修飾する。従って、この複合語は<家のメンバー>と直訳することができ、<家族の人々>という意味を表す属格複合語 (Genitive Compound) である。

古典アラビア語において、〔名詞+al-名詞 (属格)〕によって構成される属格複合語が主格のとき、当然、はじめの名詞の格母音は主格母音の /u/ である。また、属格複合語が一般的にとりあげられて全体が発音される際も、はじめの名詞の格母音は主格母音の /u/ で発音される。上述の古典アラビア語の属格複合語の場合、はじめの名詞 ahl のあとの u の音は主格母音 /u/ の発音である。その名残がインドネシア語の ahlulbait の中にとどめられているのであり、それは /ahlulbait/ の中の /u/ の音である。

古典アラビア語において、定冠詞 al は前の語と続けて発音されると、al のはじめのハムザと母音 /a/ は発音が省略されるから、上述の複合語全体が発音される場合、ahl の主格母音 /u/ は al の /l/ の音に続けられる。ahlulbaiti の最後の i の音は、al-bait の属格母音 /i/ の発音である。

尚、古典アラビア語において、属格複合語が一般的にとりあげられて全体が発音される際に、最後にくる名詞 (属格) の語末母音である属格母音 /i/ は発音が省略されることがある。上述の複合語において、al-bait の属格母音 /i/ は発音が省略されて、複合語全体が ahlulbait と発音さ

れることがある。

更にいくつかの例を見よう。kalimatullah /kalimatullah/ <神の言葉>は次の古典アラビア語の複合語に語源をたどることができる。

كلمة الله · kalimatullāhi <神の言葉>

これは كلمة kalima <言葉>と الله allāh とから成る属格複合語である。allāh は属格で、前の語の kalima を修飾し、この複合語は<神の言葉>という意味を表す。كلمة の *ka*、即ちター・マルブータ (Ta' Marbūṭa) は、あとに属格の語がくると、語と語が続けて発音される際、必ず発音され、そのター・マルブータの音は /t/ の音である。いま allāh という属格の語が kalima という語のあとにきているから、これらが続けて発音されると、kalima におけるター・マルブータは必ず発音される。古典アラビア語において、属格複合語が主格のとき、それを構成するはじめの語の格母音は主格母音の /u/ であり、また、属格複合語が一般的にとりあげられて全体が発音される際も、はじめの語の格母音は主格母音の /u/ で発音されるから、上述の複合語におけるはじめの語 kalimat のあとの *u* の音は、主格母音 /u/ の発音である。その名残がインドネシア語 kalimatullah の中にとどめられているのであり、それは /kalimatullah/ の /u/ の音である。allāh という語は前にくる語と続けて発音されると、はじめのハムザと母音 /a/ は発音が省略されるので、上述の複合語の場合、kalima と allāh が続けて発音されると、kalima の主格母音 /u/ は allāh の /l/ の音に続けられる。kalimatullāhi の最後の *i* の音は、allāh の属格母音 /i/ の発音である。尚、属格複合語が一般的にとりあげられて全体が発音される際、最後にくる語の語末母音は発音が省略されることがあるから、上述の複合語が一般的にとりあげられて全体が発音される際、allāh の属格母音の /i/ は発音が省略されることがある。

darussalam /darussalam/ <平和な地、極楽>は次の古典アラビア語の複合語に語源をたどることができる。

دارالسلام dārussalāmi <極楽>

これは دار dār <地>と سلام salām <平和>に定冠詞の ال al がついた السلام al-salām とから成る属格複合語である。salām は سلم salima <平和である>という動詞から派生する動名詞の中のひとつである。この複合語において、al-salām は属格で、前の名詞 dār を修飾する。従って、この複合語は<平和な地>と直訳することができ、<極楽、天国>という意味を表す。古典アラビア語において、属格複合語が主格のとき、それを構成するはじめの語の格母音は主格母音の /u/ であり、また、属格複合語が一般的にとりあげられて全体が発音される際も、はじめの語の格母音は主格母音の /u/ で発音されるから、この複合語において、はじめの語 dār のあとの *u* の音は主格母音 /u/ の発音である。その名残がインドネシア語 darussalam /darussalam/ の中の /u/ の音である。古典アラビア語において、太陽文字ではじまる語の前に定冠詞の al がつくと、これらが続けて発音される際、al の /l/ の音は次の太陽文字の音に同化されるが、いま al-salām が続けて発音される際、salām は Sīn という太陽文字ではじまるから、al の /l/ の音は

Sin の音の /s/ に同化される。従って assalām と発音される。いま、al-salām の前に dār という語があって、これらが続けて発音される際は、al のはじめのハムザと母音 /a/ は発音が省略されるから、また al の /l/ の音は salām の /s/ の音に同化されるから、全体は dārussalāmi と発音される。最後の i の音は al-salām の属格母音 /i/ の発音である。この複合語が一般的にとりあげられて全体が発音される際、al-salām の属格母音の /i/ は発音が省略されることがある。この複合語に語源をたどることができるインドネシア語の darussalam には、古典アラビア語の発音の際におこる同化 (Assimilation) の音形がとどめられている。古典アラビア語の複合語起源の言葉の中にも、このような発音の際におこる同化の音形がとどめられているものがあり、もともと古典アラビア語が実際発音される際の音形の特徴が明瞭に表れているのである。同化の音形がとどめられているものには、ほかに silaturrahim <友愛>、kalimatussyahadat <信仰の告白>などがある。

古典アラビア語の複合語起源の言葉の中には属格母音の名残がとどめられているものもある。例えば idulfitri /idulfitri/ <断食あけの祭>という言葉における最後の /i/ の音がそうである。この言葉は次の古典アラビア語の複合語に語源をたどることができる。

عيد الفطر 'idulfitri <断食あけの祭>

これは عيد 'id <祭>と فطر fitr <断食あけ>に定冠詞の ال al がついた الفطر al-fitṭr とから成る属格複合語である。al-fitṭr は属格で、前の語の 'id を修飾し、この複合語は<断食あけの祭>という意味を表す。はじめの語 'id のあとの u の音は主格母音 /u/ の発音であり、その名残がインドネシア語 idulfitri /idulfitri/ の中の /u/ の音である。いま al-fitṭr の前に 'id という語があって、これらが続けて発音される際は、al のはじめのハムザと母音 /a/ は発音が省略されるから、'id の主格母音 /u/ は al の /l/ の音に続けられる。この複合語において al-fitṭr は属格なので、'idulfitri の最後の i の音は属格母音 /i/ の発音である。この属格母音 /i/ の音の名残がインドネシア語 idulfitri にとどめられているのである。

このように、古典アラビア語の複合語起源の言葉の中にも古典アラビア語の格母音の名残が見られるのである。それらの語中に主格母音 /u/ の名残がとどめられており、語末にも属格母音 /i/ の名残がとどめられているものもある。とりわけ、語中に主格母音 /u/ の名残がとどめられているものがかなり多く見られる。更にいくつかの例を見よう。まずインドネシア語をあげ、その次にその語源の古典アラビア語をあげてその構成について述べる。

(a) ahlulkitab /ahlulkitab/ <聖書の人々>

اهل الكتاب ahlulkitābi <聖書の人々 (キリスト教徒とユダヤ教徒)>

この古典アラビア語は اهل ahl <メンバー>と كتاب kitāb <本>に定冠詞の ال al がついた الكتاب al-kitāb <コーラン; 聖書>とから成る属格複合語である。

(b) baitulmal /baitulmal/ <宝庫>

بيت المال baitulmālī <宝庫>

この古典アラビア語は بيت bait <家>と مال māl <財産>に定冠詞の ال al がついた البيت al-māl とから成る属格複合語である。

(c) darulbaka /darulbaka/ <来世>

دارالبقاء dārulbaqā'i <来世>

この古典アラビア語は دار dār <地>と بقاء baqā' <永続、永久>に定冠詞の ال al がついた البقاء al-baqā' とから成る属格複合語である。baqā' は بقي baqiya <続く>という動詞から派生する動名詞である。尚、この複合語が一般的にとりあげられて全体が発音される際は、al-baqā' の属格母音 /i/ は発音が省略されることがあるが、このとき baqā' のハムザの音（声門閉鎖音）も発音が省略され、全体は dārulbaqā と発音される。一般に آ ā（アリフ・マムドゥーダ）でおわる語の語末母音の発音が省略される場合、ハムザの音も共に発音が省略されるからである。この複合語の baqā' はアリフ・マムドゥーダでおわっている。

(d) darulfana /darulfana/ <現世>

دارالفناء dārulfanā'i <現世>

この古典アラビア語は دار dār <地>と فناء fanā' <消滅>に定冠詞の ال al がついた الفناء al-fanā' とから成る属格複合語である。fanā' は فنى faniya <消滅する>という動詞から派生する動名詞である。尚、al-fanā' の属格母音 /i/ の発音が省略される場合は、fanā' のハムザの音も発音が省略される。fanā' もアリフ・マムドゥーダでおわっているからである。

(e) hakulyakin /hakulyakin/ <確信>

حق اليقين ḥaqqulyaqīni <確信>

この古典アラビア語は حق ḥaqq <真実；権利>と يقين yaqīn <確信>に定冠詞の ال al がついた اليقين al-yaqīn とから成る属格複合語である。

(f) rasulullah /rasulullah/ <神の使者（マホメット）>

رسول الله rasūlullāhi <神の使者（マホメット）>

この古典アラビア語は رسول rasūl <使者>と الله allāh とから成る属格複合語である。

(g) sakratulmaut /sakratulmaut/ <死の苦しみ>

سكرة الموت sakratulmauti <死の苦しみ>

この古典アラビア語は سكرة sakra <陶醉>と موت maut <死>に定冠詞の ال al がついた الموت al-maut とから成る属格複合語である。maut は مات māta <死ぬ>という動詞から派生する動名詞である。

お わ り に

インドネシア語のアラビア語起源の言葉の中には古典アラビア語（正則アラビア語）の格母音の名残がとどめられているものがある。古典アラビア語の主格、対格、属格を表す格母音の名残が文、句、複合語起源の言葉の中にとどめられているのである。

インドネシア語に見られるアラビア語起源の言葉は、それがアラビア語起源であることが明らかであっても、古典アラビア語からのものか、あるいは口語のアラビア語方言からのものか、いずれか定めることは難しい。例えば、インドネシア語 hadir /hadir/ <出席している>は、もともとアラビア語の能動分詞が起源である。古典アラビア語において、حضر ḥaḍara <出席する>という動詞から派生する能動分詞 حاضر ḥāḍir <出席している>であるが、口語のアラビア語方言にもこれに対応する能動分詞の語が存在する。従って、インドネシア語の hadir という語はアラビア語起源であることが明瞭であっても、古典アラビア語からのものか、口語のアラビア語方言からのものか、いずれか定めることは困難である。しかしながら、格母音 (Case Ending) は口語のアラビア語方言にはないといわれる。そうすると、インドネシア語のアラビア語起源の言葉の中にこの格母音の名残がとどめられているものは、古典アラビア語起源のものであると言えるであろう。

主要参考文献

- ・ Susunan W. J. S. Poerwadarminta, Diolah kembali oleh Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa Departemen P dan K; kamus Umum Bahasa Indonesia, Jakarta, 1976.
- ・ John M. Echols, Hassan Shadily ; An Indonesian-English Dictionary, Second Edition, New York, 1963.
- ・ Prof. Drs. S. Wojowasito, W. J. S. Poerwadarminta ; Kamus Lengkap, Tjetakan ke- II, Djakarta, 1972.
- ・ E. Pino, T. Wittermans ; Kamus Inggeris II, Indonesian-English Dictionary, Second Edition, Djakarta, 1955.
- ・ Hans Wehr ; A Dictionary of Modern Written Arabic edited by J Milton Cown, Third Edition, New York, 1976.
- ・ A. S. Tritton, D. Litt. ; Teach Yourself Arabic, London, 1967.
- ・ David Cown ; An Introduction to Modern Literary Arabic, London, 1975.
- ・ De Lacy O'leary, D. D. ; Colloquial Arabic, London, 1951.
- ・ Frayha, Anis ; The Essentials of Arabic, Beirut, 1958.
- ・ T. F. Mitchell ; Colloquial Arabic, London, 1976.
- ・ 黒柳恒男、飯森嘉助; アラビア語入門、東京、1976.
- ・ Dr. Tochanan Kapliwatzky ; Arabic Language and Grammar, Jerusalem, 1940.
- ・ Dr. Tochanan Kapliwatzky ; Arabic Language and Grammar, part II, Jerusalem, 1950.
- ・ W. Wright, LL. D. ; A Grammar of the Arabic Language, third edition, London, 1967.
- ・ J. A. Haywood, H. M. Nahmad ; A New Arabic Grammar of the Written Language, London, 1962.
- ・ Elias A. Elias ; The School Dictionary English-Arabic, Fourth Edition, Cairo, 1940.
- ・ F. Steingass, Ph. D. ; The Student's Arabic-English Dictionary, London, 1884. etc.